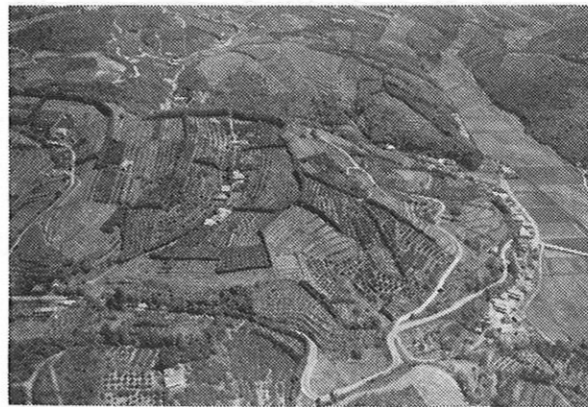


続出荷しうる体制を確立するならば、芦北の果樹の前途は洋々たるものである。

宇城

豊かな南の風につつまれる宇城地方の果樹農業は、適地適産のもとに、生産性が比較的に有利な点から近年、急速に増産振興が行なわれ、今や宇城地方の重要な産業へと発展してきている。

昭和三十五年度の果樹面積は九六〇〇畝であったが昭和四十年には二七〇〇〇畝と毎年三五〇〇畝の新植をみ、全国でも屈空からみた宇土半島のみかん園……



指の大集団産地が形成されつつある。その中心は柑きつだが中でもみかんが六七〇を占め、甘夏柑、くりの順に伸びている。この増殖テンポは、さきに樹てた果の昭和四十年計画より四〇〇〇畝、一七〇多い。したがって昭和四十五年計画の三千一三五畝達成は十分可能とみられている。

果実販売においては、計画的な大量共販により、市場における有利な価格形成をはかるため、昭和三十八年度、三角町に、昭和四十年には宇土市に、それぞれ年間一万ト処理能力のオートメ選果場が建設された。特に宇土市に建設した選果場は将来の広域経済圏を指向して、一市八町村、一七農協が大同団結し鉄道、幹線道路など恵まれた立地条件のもと、きたるべき産地間競争の激化、流通市場

果樹コンビナートへの姿勢

ところで個別果樹農家の経営組織をみてみると、過去昭和二十年代まで黒砂糖、甘藷などを主体とした農家経営であっただけに果樹専業農家は少なく、果樹農家四千三〇〇戸の二〇〇に過ぎない。他は米、たばこ、そさいなど換金作物との複合経営である。さらに、宇城地方は都市近郊にあるため労働力不足と共に労賃が高く、生産コスト低減への隘路となっている。しかし、果樹農家は自立経営への意欲が強く、生産性の低い樹種は、

現在、不知火町の果樹栽培農家は約五五〇戸。面積約三五〇〇畝。果樹生産額は、町全体の農業生産額の三五〇を占めている。その内、暖地の特性を生かして、六月下旬から七月中旬にかけて出荷されるビニールハウス栽培によるかどうか、引き続き出荷される露路かどうか早期出荷の「不知火ぶどう」として、九州一円の市場に歓迎されている。しかし、これからの主体となるのは、温州みかんや甘夏みかん。三十九年度から始まった農業構造改善事業でも、みかんを主幹作物としてとりくみ、すでに四十年には六町の果樹である。

協業体制への移行

〇畝の増産をみている。また、永尾部落では約四〇名の既存農家が、共同作業で山林一六畝を開墾。山肌を広がる耕地に、完全な協業体制で、ことしの四月から甘夏が新植された。経営規模の拡大、省力化など、経営の合理化が望まれている折柄、この協業体制は、これからの一つの指針として期待されている。

おねがい

「エコーカード」の回答は、もれなくどうぞ……

県では公聴業務の一環として「エコーカード」により、毎年皆さんから県政についてのご意見をお寄せ頂き、県政推進上の資料としてまいりました。このたびは第五回目のカードをお送りすることになりました。このカードの対象は、基本選挙人名簿からの無作為抽出（一〇〇名に一人の割合）によるものですが、今回はその中、城南地区約三千名あて送付することにしています。
★カードを受取られた方々は、どうかおめねなくご意見、ご批判をお寄せ下さい。

★城南林業の焦点

他産業との調和による

新しい林業への脱皮を……

宇土、上・下益城、八代、芦北地区の林野総面積は、県下林野総面積の約四分にあたり、球磨、阿蘇とならび有力な本県的林業地帯を形成している。

四二〇までのばらつきを見せ、地域的な実相の違いが激しい。日本を代表するような葦北の林業地帯から五家荘地方の低質葉樹、宇土のせき悪林地帯まで包括する状態である。

この地区の林業は人工林率八三〇から

手入れが届いてすくすく伸びる杉山……



芦北地方は、森林の育成にかならずしも、満足な条件を具備しているわけではないが、陸海運の便に恵まれ、遠く二百年前から松を中心とした木場作を併用して林業が行なわれ、日本の代表的な松林業地帯を形成した。この

の林業は、明治以降、北九州炭鉱の盛衰と共に、坑木供給林業地として繁栄してきたが、近時エネルギー源が石炭から石油へ転換し、坑木需要

減となり、用材バルブ等の供給林業地に転換し、将来の需要構造の変化に対応した林業地への脱皮が推進されつつある。

〇八代地方

八代地方は、球磨川の下流及び氷川水系にわたり特に秘境で知られる五家荘地域の全域にわたっている。球磨川流域は比較的交通の便もよく、杉を中心とした林業が発達し、人工造林率も高い。五家荘地区は昭和二十六年に着工し、三十三年に完工した奥地基幹線林道（椎原から二本杉に至る延長二六〇）が出来るとは全くの未開発地帯であったので、まだ後進性を脱却し得ず、人工造林地が少なく、天然低質広葉樹が大部分を占めている現状である。

一方、五家荘は球磨川、氷川の源流にあたり、水資源、国土保全の立場から見ると重要な位置を占めており、厚生保健面とあわせて森林の価値、あり方を検討しなければならぬ地区である。

高収益林業から都市近郊林業まで

〇益城地方ほか

宇土、上・下益城は、緑川水系を中心に五万畝の林野を有している。砥用矢部を中心とした杉の造林地帯は他に遜色のない優良林業地帯を形成しているが、大

(表1) 森林現況表

林種	用材林				薪炭林	無立地	計	林種	合計
	すぎ	ひのき	まつ	その他					
芦北	7,249 33%	3,423 16	11,058 51	21,730 83	3,265 12	432 2	25,427 97	795 3	26,222 100
八代	13,892 67%	2,271 11	4,516 22	520,684 53	16,559 42	1,152 3	38,395 98	802 2	39,197 100
宇城	5,569 31%	997 6	1,137 6	7,703 43	8,169 45	346 2	16,218 90	1,744 10	17,962 100
上益城	10,414 35%	1,890 6	435 1	12,739 42	8,058 27	1,088 4	21,885 73	8,120 27	30,005 100
計	37,124 33%	8,581 8	17,146 15	562,856 56	36,051 31	3,018 3	101,925 90	11,461 10	113,386 100

を検討しなければならぬ地区である。

矢野原一帯の原野や平坦地区のせき悪林地等に問題を内包し、熊本市を近くにひかえた林業地であり、他産業に対応した林業の推進を迫られている地域である。